

◆プログラム実施「大島ゆめゆめキャンプ」

七色の蟻を大きな石のキャンパスに。 個々が作業に責任を持ち、取り組 んだ活動。できあがった夢の架け橋 は子ども達の旅立ちの象徴だ。

「できかけ教室」は年齢や立場の違いを超えた様々な人が集うコミュニケーションの拠点です。なんと、過去の「夢学校」の生徒達は教室の壁塗りを担当。まさに、自分達の居場所を自分達でつくったのです。その後も子ども達の造形活動、キャンプ活動の拠点として、「できかけ教室」と「夢学校」は二人三脚で歩んできました。建物づくりに関わるといふ壮大なプログラムの実現は、場所の所有者の理解があってこそ。この教室を運営する吉井游児さんは、衣食住という人として必要な営みを、できるだけ自足したいという思いを強く持っていらっしやいます。具体化するために必要な知識や技術も経験でフォロー。子ども達にも大きな刺激となっています。

今回、「できかけ教室」が提案するプログラムは、ダイナミックな絵画制作ワークショップ。キャンパスは庭にある大きな石というスケールの大きさ。子ども達の豊かな表現活動を応援したいという吉井さんの願いから生まれた企画です。ここで大切なのは、作品の完成度のイメージの共有です。子ども達に自由に好きな絵を描かせていては、他者が共感する作品にはなり得ません。そこで吉井さんが作品のテーマを設計。イメージをデッサンし、子ども達に提示しました。



と き：平成19年10月13日・14日
ところ：できかけ教室（今治市吉海町名 1182）
先 生：できかけ教室の皆さん
参加者：学生スタッフ 9名
子ども 36名

テーマは「虹脚埋宝伝説」。いつの間にかあられ、しばらくして幻と消えてしまう虹。「虹の橋のたもとには宝物が埋まっている」、そんな伝説が生まれたのは、はかないものへの人の憧れでしょうか。そこにあるようで、手を伸ばしてもつかむことができない、「愛・友情・祈り・平和」を「虹」へ重ね、子ども達がキャンパスに描きます。この虹を「蟻」で形づくるといふのが吉井ワールド。「蟻」＝「地球に住む私たち小さな子ども達」です。



子ども達は食事を作ったり、テントをはったりと様々な作業を担わなければなりません。1泊2日のキャンプ活動とは言え、絵画制作ワークショップに専念できる時間は4時間程度。意外に時間が限られていました。

ただ、2日目は夜のミーティングの成果も表れ、作業は順調に進行。学生スタッフや吉井さんによる全体を見渡しながらの修正も加わり、ダイナミックな夢の架け橋・虹が完成しました。

「みんなが描いた虹をいつでも見に来て欲しい」自分達の作品が半永久的にここ「できかけ教室」に展示されます。数年先、みんなで作った虹を見上げながら、夢を語り合いたいものです。

◆プログラム実施「大島ゆめゆめキャンプ」

(プログラムの流れ)

【13日 13:30】



会場は同じ今治市内とは言え、瀬戸内海に浮かぶ島。フェリーと路線バスを乗り継ぎ、「できかけ教室」を目指す。船に乗るのも、バスに乗るのも初体験という子どももいて大はしゃぎ。4つのグループに分かれ、見守りは徹底したもののスタッフは気が抜けない。

【13日 14:20】



会場に広がる独特の雰囲気子ども達の目は輝く。壁には「儉約三昧」という文字が並ぶ。この教室のコンセプト「儉約」のメッセージも語られた。オリエンテーションを済ませ、早速、ワークショップスタート。まず、スケッチブックに描いた「蟻の虹」を前に子ども達と意見交換。

「蟻の絵を描いたことがある人」との問いかけに、数名の子ども達の手が上がる。みんな「蟻」の形はイメージできるよう。実際にデッサンを行う。「こんな格好の蟻を描いていこう」と、みんなが共有。

【13日 15:00】



まずは、七色の水生ペンキづくり。色を混ぜ合わせて新しい色を生み出していく。みんな興味津々。

【13日 16:00】



思い思いの色を選び、作業スタートして1時間。最初は戸惑っていた子ども達もあっという間に作業に没頭。その集中力に大人の方がびっくり。「色の配列を間違ったらつじつまを合わせて」なんて、難しい提案にも耳を傾ける子ども達。

◆プログラム実施「大島ゆめゆめキャンプ」

【13日 17:00】



1日目の作業は終了。グループで分担して夕食準備。高校生スタッフが野菜の切り方を教える。



薪で火をおこし、お米を炊く。火を使う現場は注意が必要。大人の見守りを徹底したい。



自分達で力を合わせて作ったご飯。炊き込みご飯は実は、ちょっと芯が残ってしまい失敗作。でも、みんな「おいしい」と完食。

【14日 9:30】



「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」
虹の色の見え方の説明から始まった先日の夜の反省会。「蟻」「虹」に込められた願いも聞いた。作業に向かう子ども達に意識の変化はあっただろうか。



「蟻」の数が増えていくに連れ、迫力が増す。



吉井さんも作業に加わる。その手を見ながら、子ども達は腕をあげていくよう。石の壁面まで丁寧に描いていく。

【14日 11:30】



作業終了。「ここまでできたら完成」、そんな明確なゴールがない活動だったが、子ども達の満ち足りた表情に、この子たちなりのゴールを見た気がした。次の担い手が現れ、付け加えいくことも面白いかもしれない。



作業を終えた子ども達の前にたった吉井さん。「今回の企画は得るものがたくさんあった」と、まず、子ども達に伝えた。「計画を立てて取り組むことの大切さ」「状況を見ながら臨機応変に対応できる力」、アドバイスは日常生活にも大きく役に立つだろう。

◆プログラム実施「大島ゆめゆめキャンプ」

(子ども達の声)

- ありをかくのはしんどかったけど、自分がリーダーだったので、みんなをまとめてがんばった。高校生の知恵や手助けがあったからできたと思う。
- ありをかくにはすごくおもしろくて、わくわくした。ちょっとけんかになったけど、ちゃんとかけた。自分たちのありが作れてよかった。
- いろいろふしぎなものを見せてくれてうれしかった。声をかけあって楽しくできた。

(学生スタッフの声)

- 4つのグループに分かれて、それぞれが目標を持って取り組むことができた。子ども達は洋服や顔を汚しながら、真剣に取り組んでくれた。
- スタッフが自分で先のことを考えて動かなければ、子ども達も動いてくれないと思った。

(先生の声)

このワークショップをやってよかったのか、いけなかったのか今も迷っている。ただ、提案した企画にスタッフも含め子ども達が真剣に取り組んでくれたことをうれしく思う。スタッフにとっても感謝している。参加した子ども達にも、将来は、スタッフの立場として活躍できる人になって欲しい。



